

# 武蔵野

## ヒストリー

武蔵野にまつわる歴史を  
楽しみながら学ぶ

### —むさしの文學館 #3—

武蔵野市ゆかりの  
文学者たちの人生、作品世界、  
市との関わりなどを紹介します。

# 野口雨情



雨情48歳の頃。吉祥寺に居を構え、新民謡運動の活動を精力的に行っていた(写真提供/北茨城市歴史民俗資料館・野口雨情記念館)。

### 新聞記者を経て 童謡の名作を次々と発表

童謡『七つの子』や『赤い靴』、『シャボン玉』の作者として知られる野口雨情は、明治15年茨城県で生まれました。本名は、野口英吉。野口家は楠家の流れをくむ水戸藩の郷士の家で、父・量平は廻船業を営み、雨情も裕福な子ども時代を送ったようです。

明治34年には、東京専門学校(早稲田大学の前身)高等予科に入学。同じ文学科には、『赤い蠟燭』と『人魚』の作者、小川未明が在籍していました。

た。既に13歳で作品の投稿を始めていた雨情は、ここで坪内逍遙に師事したといわれています。明治35年には『婦人と子ども』誌に詩作を発表し、初めての原稿料を得ました。

順風に見えた文学者への道は、父・量平の死によって急変します。帰郷した雨情は野口家の継承者として家督を継ぎ、明治38年には高塩ヒロと結婚しました。帰郷後も精力的に詩作を続け、第一詩集『枯草』を発表しましたが、翌年、突然樺太に渡航します。帰国後、一時東京に戻ると、明治42年に再度上京するまでは、

### 来歴

明治15(1882)年	茨城県多賀郡北中郷村磯原(現・北茨城市磯原町)に生まれる。本名は英吉。
明治34(1901)年	東京専門学校(早稲田大学の前身)高等予科文学部に入学。
明治36(1903)年	父・量平死去。帰郷して家督を継承。
明治38(1905)年	高塩ヒロと結婚。
明治40(1907)年	「早稲田詩社」の結成に参加。北海道に渡り北嶋新報社に勤める。その後、小樽日報の創業に参加。
明治42(1909)年	上京し、牛込区若松町(現・新宿区)に住む。
大正 4(1915)年	ヒロと協議離婚。
大正 7(1918)年	中里つとと再婚。
大正 8(1919)年	詩集『都会と田園』を出版。雑誌『金の船』創刊号に童謡を発表。
大正 9(1920)年	上京し、雑誌『金の船』編集部に入社。『十五夜お月さん』を発表。
大正10(1921)年	『枯すすぎ』を『船頭小唄』に改題。『七つの子』『青い眼の人形』『赤い靴』を発表。
大正11(1922)年	『黄金虫』『シャボン玉』を発表。
昭和19(1944)年	栃木県姿川村鶴田(現・宇都宮市)に転居。
昭和20(1945)年	自宅にて死去。享年63歳。

くつかの新聞社を転々としていた。『小樽日報』に勤めていたときには、石川啄木とともに働いていました。

明治44年、雨情は現在の文京区へ移転。雑誌『グラヒック』の編集に携わります。ヒロとの離婚を経た後、大正8年には『都会と田園』を出版。この詩集を機に中央詩壇への復帰を果たした雨情は、大正9年から雑誌『金の船』(後に『金の星』に改題)編集部勤務し、童謡の選者を務めながら次々と作品を発表しました。作曲家の中山晋平が曲をつけた『船頭小唄』は、松竹から映画化されるほどの大ヒットに。『十五夜お月』(後の『十五夜お月さん』)をはじめ、後世まで歌い継がれる童謡を次々と発表しました。

### 多くの人が訪れた 吉祥寺の「童心居」

雨情がそれまで暮らしていた西巣鴨を離れ、吉祥寺に移り住んだのは大正13年のことです。震災を経験した雨情は安定した地盤を求め、武蔵野の分譲地を買いました。現在、井の頭恩賜公園には「童心居」という小さな建物があります。これは、雨情が吉祥寺在住時の書齋を



吉祥寺の自宅にて家族と。『定本 野口雨情』より(写真提供/北茨城市歴史民俗資料館・野口雨情記念館)。



(上) 井の頭恩賜公園に設置されている歌碑には、雨情が作詞した『井の頭音頭』の一節が刻まれている。

(左) 吉祥寺の自邸の一隅に建てられた最初の「童心居」。『定本 野口雨情』より(写真提供/北茨城市歴史民俗資料館・野口雨情記念館)。

井の頭恩賜公園内、井の頭自然文化園に移築された雨情の書斎「童心居」。一般の方も有料で借りることができ。



移築したもの。雨情はここで、多くの作品の執筆にふけりました。ご子息であり、詩人・野口雨情の研究者でもある野口存彌氏によると、当時の吉祥寺はまだ開発が進んでおらず、裏には広い野原が広がっていたとか。波乱に満ちた人生を送っていた雨情にとつて、これが初めての持家となりました。

既に童謡作家として名を馳せていた雨情は、各地に伝わる伝承歌を採集し、さらにその地にふさわしい歌を残そうとする新民謡運動を音楽家らと展開。共に活動をしていた作曲家の藤井清水や声楽家の権藤円立と、3人で地方を回る旅に出ることも多かったそうです。

世話好きであった雨情を慕って野口邸を訪れる人も多く、中でも『橋のない川』の著者である住井すゑとは、夫の犬田卯も交えて親交が深かったとか。妻・つるの乳の出が悪い時は、住井すゑにもらい乳を頼むこともあったほどでした。住井すゑは、「一九二八年(昭和三)の夏、念願漸くかなって訪ねた「童心居」

まわりのしの竹は、思いのほか、太くて丈高かった。雑草のかげも広い広々とした庭と、住居の軒端を埋めるアケビ柵の、したたるような緑だった」と、『童心居のしの竹』という一文の中で、当時の野口邸の様子を振り返っています。

「家族の前では寡黙で、自分のことを話す人ではなかった」と野口存彌氏が語るように、雨情は家での時間のほとんどを書斎で過ごし、「机の前に座って、いつも何かを深く考えていた」そうです。時には自らの詩を口ずさみながら、立ったり座ったりしつつ、詩作に没頭していたこともあったそうです。

円熟した作家活動を吉祥寺で送っていた雨情は、病を経て、昭和19年に栃木県に転居。翌年に逝去しました。雨情が作詞し、武蔵野市立第一小学校の校歌となった「西空遠く雲をぬき／そびゆる富士の姿をば／常に仰ぎて変りなく／正しき道をいざゆかん」の一節から、20年間を過ごした吉祥寺への思いを偲ぶことができます。

## 野口雨情に触れる この2冊



### 『名作童謡 野口雨情100選』

野口雨情の作詞による童謡から、選び抜いた名作100選を収録。評伝・年譜つき(春陽堂書店)。

### 『野口雨情』

雨情による随筆・書簡・紀行文などから、雨情の人生をたどる作品を収録(日本図書センター)。

【お詫びと訂正】本誌第107号(2014年夏号)の武蔵野ヒストリー「10頁」ルーツの地を探る吉祥寺と西久保」の記事中、最初に吉祥寺があった場所(水道橋北側)の説明として「『西は日光御成街道をへだて駒込片町、南は百姓地、北は駒込富士前町に接していた』といわれています(『江戸東京地名事典』より)」と記載しましたが、これは焼失により移転した場所(現在の本駒込)の説明でした。また、11頁の年表中の「万治2(1654)年」は「万治2(1659)年」の誤りでした。お詫びして訂正します。